ヨハネ 15 章 1-10 節

「まことのぶどうの木」

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である（1節）」とあるように、このたとえ話は、主イエスがぶどうの木であり、主なる神様が農夫であるということが前提のお話です。主イエスと私たち人間との関係より先に、主イエスと主なる神様との関係を見つめているのです。

主なる神様の働き。それが2節に書かれています。ここで、主なる神様の働きが、枝を手入れするものとして、枝である私たちは、神様から手入れされるものとして見つめられています。そして大切なことは、主イエスとつながっているかどうか、実を結んでいるかどうかという2点です。神様は、ぶどうの枝を良いものと悪いものを見分け、剪定し、悪いものを取り除きつつ、実を結ぶ枝がより一層豊かに実を結ぶようにされる、というのです。「取り除く」というと非常に厳しい言葉のように思います。しかしこの言葉は、どのような人であっても、一人の人間の内側に、良い実りをもたらさないような要素がある、と指摘しています。それを、私たちの罪と言います。主なる神様は、その罪を取り除き、私たちが良い実を結ぶことが出来るように養って下さっているのです。

では、主なる神様の手入れは、どのようにしてなされるのでしょうか。3節で、御言葉によって清くされていることが語られています。神様の手入れは、主イエスの御言葉を通して実現する。主イエスの御言葉は、農夫が果実を実らせるために剪定するように、私たちが真の実りをもたらすように、私たちを剪定するということです。つまり、御言葉に聞くと言うことは、私たちの中にある真の実りがならない部分を取り除くことなのです。このことが語られた上で、4節以下で、まことのぶどうの木である主イエスとその枝である私たちの姿が語られていくのです。私たちは、常に、キリストこそが真の木であり、その御言葉によって、自分自身が、主なる神様に手入れをされ、変えられていかなくてはなりません。それは、時には苦しみがあるでしょう。しかし、そのことによってこそ、真の罪の赦しと、キリストによる新しい命と言う本当の実りが与えられていくのです。主なる神様から、真の命に通じる御言葉を与えられ、生かされていくところにこそ、私たちの真の実りがもたらされて行くのです。

私たちは、ただ、自らが枝であることを示されて、木であるキリストにしっかりと結びつくこと。すなわち御言葉によって剪定され、自分の思いが打ち砕かれていくことによってこそ、真の実を結ぶ者とされるのです。主なる神様は、今日も、主イエスの御言葉を通して、私たちを清くしようとしておられます。自分の力で神の前に立とうとするのではなく、キリストによって生かされていることを知らされ、キリストによって与えられる命を受けつつ歩んで行く所に、真の実りが生まれて行くのです。それは人間が考えつくような実りではありません。しかし、私たちの滅び行く命を超えて、真の命に通じて行く、確かな実りなのです。主の御言葉に生かされて、新たな歩みを始めたいと思います。